



「あきらめずに努力すれば、 報われるときが必ず来る」

HIV感染率が世界一高いとされるボツワナで、念願のエイズ対策に当たるシニア海外ボランティアの藤井千江美さん。23歳で初めての一人旅に挑戦して以来、どんなこともあきらめずにチャレンジしてきたのは、自分の殻に閉じこもっていた後悔の4年間があったからだ。

拒食、過食、 そして引きこもり

2005年10月、一人の女性が新しい人生の扉を開いた。藤井千江美さん、43歳。同年春にシニア海外ボランティアに応募し、念願だったエイズ対策の活動に携わるためボツワナへ赴任することが決まった。「合格通知を見たときは本当にうれしくて大泣きました」。あふれ出る喜びの裏には、ここへたどり着くまでに幾度となく流した涙があった。

「ふぎで当たり前」と教育に厳しい両親に育てられ、ずっと優等生であった藤井さんは、高校時代、成績不振で初めて挫折を味わい、自分の殻に閉じこもるようになっていった。周囲の反対を押し切り浪人して早稲田大学に入学したものの、状況はひどくなるばかり。その上、このころ胃かいよつを患い食べ物を拒む日が続き、体重が39キロにまで激減した。しかしその反動で過食状態になった彼女は半年で20キロも増加。自己嫌悪とコンプレックスはますますひどくなり、結局1年で大学を中

退、下宿に引きこもる生活が続いた。

そんな藤井さんが自分を変えようと23歳の誕生日に一人旅を決心する。「なぜそう思ったのか覚えていませんが、誕生日の半年ほど前から『自分は何してるんやろう。何がしたいんやろう』って考えるようになったんです。そのとき旅について思いを巡らし、東京から奈良まで一人旅に踏み切る。たった1泊2日でも初めて挑戦した旅は、コンプレックスの塊だった彼女の自信を取り戻し、「人と話す」ことを思い出させる大きなきっかけになった。

その翌年、藤井さんは初の海外旅行にも挑戦する。それも40日間かけて列車でヨーロッパを

回る壮大な旅だ。「リスボンまでの航空券と安宿を記したノートだけ持って出ました。英語も話せなかったので本当無謀やったんですけど」と苦笑しながら振り返る。次々と出くわすトラブルに泣きながらも何とか一人で乗り越え、旅を続けられたことは確実に彼女に自信をもたらしていた。

その後も仕事の合間を縫って

さまざまな国へ旅に出た。そして90年、スイスで日本人観光客を受け入れる旅行の職に就いた。

アフリカとの出会い

スイスでも休暇を利用してよく旅をしていた藤井さん。偶然知り合った西アフリカ在住のスイス人男性と車でサハラ砂漠を縦断してからは、西アフリカの虜になったという。

「縦断が終わって帰国しようとしたら、『もう少し西アフリカを見ていかないか』と彼に誘われました。ただ興味があつたのは砂漠だけで、アフリカは汚い、怖い、虫や病気がいっぱいというイメージだったので一度は断つたんです。でも、西アフリカの何が彼をそんなに魅了しているのかを知りたくて、旅を続けることにしました。そして最後にマリを去るとき、私までもが後ろ髪を引かれる思いになりました」

そして半年後、再び西アフリカを訪れた藤井さんは、行った先々で会う人に必ず「君はボランティアかい？」と聞かれる。これまで旅してきた国々と違い、



ブルキナファソで長屋の一角を借りて地元の暮らしを体験。水は共同の井戸からくみ、明かりは薄暗いランプ、トイレも穴が一つ空いただけの簡素なものだったが、近所の人たちに助けをもらいながら、1カ月間楽しい日々を過ごした



Fujii Chiemi

シニア海外ボランティア
藤井 千江美



日本人観光客を案内したザンビアのサファリパークにて。南アフリカでは、ホテルや車の手配、ガイド、通訳と一人で何でもこなした

アフリカではJICAボランティアをはじめ多くの日本人が支援活動を行っており、地元の人にとって日本人は「ボランティア」というイメージが強い。確かに自分は安宿に泊まり、地元の人と同じ乗り物で移動し、同じ物を食べている。でも目の前にはその日を生きるのに精一杯で旅行などできない人々がいた。次第に旅行者という自分に恥ずかしさを感じ始めた藤井さんは、ブルキナファソで長屋の一角を借り、1カ月間地元の人々の暮らしに飛び込んだ。「郷に入りては郷に従え」で特に不便は感

じませんでした。彼らの生活の厳しさがよく分かり、心の温かきにも触れることができました。ガーナでも1カ月暮らし、そのときは川からくんできた水が合わず下痢を起こしてばかりで本当にきつかったです。ここでも地元の人たちに助けられました。まずは彼女を西アフリカの虜にしたこの経験は、後の人生にも大きな影響を与えます。

旅から戻ると、アフリカ専門の旅行会社の南アフリカ駐在員として、ツアー手配やガイドなど旅のコーディネーターの仕事に就いた。実は西アフリカの地で現地の医療状況のひびきを知り、アフリカで医療活動に携わりたいという気持ちが芽生えていたんですが、旅の仕事も好きだったし、もう29歳だったので一から学校に入って...という勇氣も覚悟もなかったんです。

だが、6年に及んだ南ア生活は医療への思いを一層強めるものとなる。「体力、気力とも今を逃したら3年間学校に通うのは無理だと感じ、思い切って看護師になる決意をしました」。そのときすでに35歳、受験勉強を経て看護学校に入学したのは37歳

のときだった。

旅行から国際協力の道へ

それからは試験の連続だった。

看護学校では周りの大半が10代の若者。彼らが簡単にこなすことが何度やってもうまくできない。悔しくて落ち込むたびに「なぜ看護師になろうと思ったか」に立ち返り、友人と励まし合いながら自分を奮い立たせてきた。40歳を迎える春、晴れて三重県の大病院で看護師としてスタートを切ったが、ここでも悪戦苦闘の日々。新人は怒られてなんぼなんですけどね。トイレでこっそり泣いたことが何度あったか」と振り返る。患者の様態が急変してもすぐに動けず、物覚えが悪いと先輩の看護師にしかられ



(上)看護学校時代の友人たちと。後列左が藤井さん。(下)南アでの仕事経験を生かし、卒業時には同級生と南アを旅行した。彼女たちに現地の医療状況を見せたらあうと、NGO訪問の機会も設けた

しませんが、40歳を過ぎて体力の衰えも実感していたし、早くアフリカで医療活動に携わりたかった」と病院を退職し、さらに専門性を高めるためイギリスに留学した。イギリスでは熱帯医学の知識の習得に加え、アフリカの医療現場を自分の目で見てみたいと、タンザニア、ケニア、マラウイ、ガーナの病院10カ所に履歴書を送った。しかし2週間待ってもどこからも返事はない。「こうなりや門前払い覚悟で直接病院を訪ねて、掃除婦でも何でもいから雇ってもらおうと思って」とケニアに飛んだ翌日、ある病院から「Welcome」という返事のメールが届いたことに気付く。しかもそこはケニアで唯一送っていた病院だった。「こんな偶然があるんやうって本当に驚きました

た。

カナダ医師が院長のその病院では世界各国の医師10人ほどがボランティアで働いていた。そこで藤井さんはケニア人の看護師とともに、HIV/AIDS患者の在宅看護を行ったり、中学・高校でエイズの予防教育活動に参加。HIVに母子感染して結核を併発し、がりがりにやせた生後9カ月の女の子の苦しむ表情を見たときは「子どもに罪はないのに」と悔しさを強く感じた。それを機に、いつかエイズ孤児やHIVに感染して生まれたアフリカの子どもたちが、少しでも生まれてきて良かったと思える時間を提供できるようにサポートをしていこうと決意する。

そして帰国後、決意を胸に、NGOのエイズ関連のプロジェクト10件以上に履歴書を送った藤井さん。しかし、NGOで働いたことがない、看護師としての経験が少ないという理由で、どこも書類審査さえパスしなかった。「看護師になってケニアで

経験も積んで熱帯医学も学んで種はまいたのに芽が出ない。気持ちが悪くだけあっても経験がないからダメと言われたら、じゃあ一歩目の経験はどこで積みやすいんですかって聞きたくなりますよな。」



5週間実習を受けたケニアのPCEA Chogoria Hospitalのスタッフたちと。ここでは病棟の巡回に同行し、症状や触診方法などの説明を受けたほか、HIV/AIDS患者向けの外来定期クリニックの診察にも同席させてもらった

思い悩んだ藤井さんは「JICAパートナー」の相談コーナーでこの思いを打ち明け、「旅行会社でのコーディネーター経験やHIV/AIDSの知識を生かして、エイズ対策のコーディネーターや保健教育などの分野でも進路を考えたらどうでしょう」とアドバイスをもらう。「おかげ

でやる気がよみがえってきました。そして勧められたシニア海外ボランティアの募集で、エイズ対策のボランティアを発見。しかも派遣先が将来ずっとかわっていきたくないと考えていたアフリカで、医療経験はそれほど問われないものだった。迷わず応募し、見事派遣が決まると涙を流して喜んだ。

「NGOから不採用の返事が続いたときはさすがにへこみました。だからボツワナ行きが決まったとき、最高にうれしかった。あきらめずに努力すれば必ず報われるんやうって」

そして今、藤井さんは世界一HIV/AIDSの被害が深刻とされるボツワナで、人々にエイズ予防の知識を行動へ移してもらうための啓発活動に取り組んでいる。ボツワナは、カウンセリングもテストも治療も薬もすべて無料の、アフリカでは恵まれたエイズ対策先進国にもかかわらず、33・4%という高い感染率が一向に改善されない状況にある。

「人間って自分が変わろうと思わない限り周囲が何を言っても無駄。でも『変わらなアカン』って思えるようになさうってかけは周りからも与えられます。それはまさに私が経験して分かったことなので、これからはそのきっかけをボツワナの人たちにつけていきたい。いろいろな問題があります。ようやく一歩目を踏み出したので少しも大変やなんて思っています」

大学時代「人の目を見て話せない子ね」と言われた藤井さんがここまで頑張れたのは、拒食過食、引きこもりを経験した20代前半の後悔があったから。そして、彼女の生き方を理解し、応援し続けてくれた両親と出会った人たちの支えがなければ、今の藤井さんはないと言っている。

もう二度と後悔したくないエイズに侵され後悔するボツワナ人をこれ以上生まないために、藤井さんは今日も同僚ときっかけづくりのアイデアを出し合っている。



昨年12月1日の世界エイズデーのイベントの様。この日に向けて保健省は国民からエイズ対策に関するスローガンを募集し、一般投票によって上位3首を決定した。行政側からの一方的な働きかけだけでなく、住民参加の必要性を強く感じたという藤井さんの発案だ

自分を変えられるのは自分だけ。でも「変わらなアカン」って思うきっかけは周りにもつくられる

Fujii Chiemi

ふじい ちえみ シニア海外ボランティア。1963年奈良県出身。早稲田大学中退後、一人旅の魅力にとりつかれ、ヨーロッパを中心に世界各地を旅する。92年、アフリカ専門の旅行会社の南アフリカ駐在員として赴任し、その後6年間南アで働く。2000年大阪府立千里看護専門学校入学。03年三重大学医学部付属病院に1年間勤務後、04年イギリスLiverpool School of Tropical Medicineで熱帯医学を学び、その間ケニアのPCEA Chogoria Hospitalで5週間実習し、HIV/AIDS問題に関心を持つ。05年10月エイズ対策のシニア海外ボランティアとしてボツワナに渡り、現在に至る。

JICAが運営する国際協力のキャリア情報サイト。
URL : <http://partner.jica.go.jp>